(6) 本法に子宮卵管造影法を併用すると、微細なX線陰影を得る。

(7) 本法は操作簡便で、副作用並びに偶発症等を憂慮するに当らない。

(8) 以上の諸点より、本法は、産婦人科領域における補助的診断法たり得る。

(9) 本法を産婦人科領域に応用し、診断的価値について論じた文献は、寡聞にして之を知らない。よつて本法を *retropneumo Gynecography* と呼称する。

147. 油滴卵管検査法に就て

(慶大) 板倉啓夫,*古川義郎,水原辰太郎
手島基之,松浦一雄

従来行われて来た子宮卵管通気法,造影法,通水法等は何れも卵管の主目的たる卵摂取輸送の問題から考えると生理的には逆行的検査法であり,その疎通性は知り得ても,順向的機能的な面を知り得ない.そこで簡単なる生理的順向的検査法にて卵管の疎通性と同時にその機能も窺い知らんとして実験を始めた.

実験方法

当婦人科来院の不妊婦人を対象とした.先ず完全脱脂のピペットとスライドを用意し腔内を十分に清拭して頸管粘液をピペットにて採取,スライドに展開して対象とし,次に通気法を施行してその型を描写せしめたのち,ダグラス窩穿刺を行つてダグラス内に滅菌ゴマ油3ccを注入した.その後毎日又は,隔日に上記と同様に頸管粘液を採取し,Oil-red O染色法に依り全視野に染色された油滴の数,直径を計測した.澱粉顆粒を混じた時は沃度染色法を併用した.

実験成績

1. 通気曲線との関係:通気型(正常〔低緊中,高緊張〕挛縮〔軽,高度〕癒着,狭穿,混合,閉鎖)と油滴出現率との関係は正常低が100%,正常中82.6%と順次低率となり閉鎖では17.8%で平均56.3%であった.油滴初出現日数は正常低2.8日,正常中3.6日と順次出現がおくれ混合12.1日で平均6.1日である.大部分の出現例は4日以内に油滴を認め6日以降に出現してくる例は極めて少い.出現油滴数は正常低,正常中では多く型順に従つて減少している.油滴の直径も正常では大で狭窄,混合となるにつれ小となる,油滴出現持続日数も正常では長く,漸次短縮する.2.月経周期との関係:月経周期と初出現日数との間には特別の関係はなく,周期の如何なる時期に油を注入してもよい.然し排卵期には出現油

滴数は少くなる.此れは頸管粘液と油滴数との間に負の有意なる相関があることより卵管運動の問題ではなく粘液が増量する為に単位体積中の油滴が少くなるものと考えられる.3.子宮位置との関係:子宮の位置的関係即ち前後屈に依る出現率の差及び子宮の發育状態即ち,發育不全,萎縮と正常との出現率,初出現日数の差はない.4.澱粉卵管検査法との関係:1%澱粉懸濁ゴマ油を使用した成績では,油滴出現率は平均55.8%であり,その内70.8%に澱粉を認めた.澱粉の出現数は全視野に数少く出現率も悪い.油と澱粉との出現日数,数,直径,持続日数は大体平行するので油のみでも卵管機能は窺えると思う.5.手術及び性器疾患との関係:卵管機能に直接或いは間接的に影響を及ぼす手術又は疾患の程度別に出現率,出現日数,出現数,直径,持続日数とみると,そこに順位的差を認め,附属器異常なきものは総べて良好であり障碍著しいものでは悪い.

結論

即ち,油滴試験成績良好なるものの卵管は形態的にも機能的にも良好なると考えられる.尚,現在本試験後の遠隔的妊娠率を検討中である.

148. Tes-Tape による排卵期の推定

(国立東二) 久保 博,熊切俊太郎,渡辺 茂
櫻井裕二,三村敦子,梅沢 享
矢野方夫,北岡 孝,橋本弘司
犬塚俊夫,小泉秀夫,齊藤 肇

排卵の有無を確かめ或いは排卵期を決定することは,不妊症,受胎調節,卵巣機能不全症などの診断並びに治療に重大な意義がある.我々は1958年 Charles H. Birnberg 等により指摘された排卵期に於ける Tes-Tape の頸管粘液による呈色反応を追試し,主として基礎体温曲線,頸管粘液の状態,中間瘤,少数例の開腹時卵巣所見などと比較検討し,併せて妊娠,産褥,閉経期,炎症性疾患などに際しての態度を検討した.

Tes-Tape は約1cm頸管内に挿入するか,又は頸管粘液に約30秒附着させ,白紙上に置いた乾燥せるガラス板上にて呈色状態を色調表と比較観察した.その結果次の2種の明瞭に異つた呈色反応を認めた.

1) 迅速呈色反応

粘液附着直後,又は30秒乃至1分以内に起る著明な青緑色(色調表によるブドウ糖0.25%以上含有)

2) 遅延呈色反応